

研究課題：ノンフィルム資料を用いたトーキー移行期の興行に関する再検討

本研究は、研究目的を踏まえて、ノンフィルム資料を用いたトーキー移行期の興行研究として、以下の三つのテーマにもとづき、共同で研究を進めた。

第一に、神戸映画資料館等が所蔵するノンフィルム資料を調査し、トーキー移行期の神戸市・兵庫県の映画館に関する研究を実施した。具体的に、湊川新開地の映画館街や、関東大震災後の外国映画の配給拠点を中心とした、神戸市・兵庫県の映画興行の諸相を明らかにした。その過程で、2018年度「人間文化実践 I」「実践演習 II」の受講生もこの調査に参加することによって、ノンフィルム資料という研究資源の教育への活用を図った。また学生による調査成果にもとづき、神戸発掘映画祭 2018の大学連携プログラム（神戸大学・神戸芸術工科大学と共催）における学生発表「湊川新開地の映画館街調査」（神戸映画資料館、2018年10月）をおこなった。あわせて、第46回有瀬図書館ギャラリー展「プログラムにみる神戸の映画館」（2018年12月～2019年3月）において、学生作成の「湊川新開地映画館マップ」他を展示した。これらの研究成果をまとめ、板倉史明編『神戸と映画 映画館と観客の記憶』（神戸新聞総合出版センター、2019年）の第2章「昭和初期の神戸市・兵庫県における映画の配給と興行」として発表した。

第二に、映画館のプラクティスに関する日印・日韓の比較研究を実施した。インドに関しては、バンガロール（カルナータカ州）及びシンガポールにおける、他言語・他民族圏の移民を主な観客層とする映画館の実地調査をおこなった。これによって、映画館の立地等も含め、映画館が移民のコミュニティにとってどのような機能を果たしているのかを調査分析した。この調査成果は、今後の教育研究に活用する。韓国に関しては、国際シンポジウム「イデオロギーと興行の間 植民地／帝国の映画館、映画文化」（ソウル・韓国映像資料院、2018年11月）を共催した。このシンポジウムにおいて、トーキー移行期にあたる1930～1940年代の日韓の映画館文化をテーマに、上田が「『満洲国』の映画館と巡回上映」を、板倉が「帝国日本における朝鮮映画の上映実態：『映画検閲時報』から読み解く」をそれぞれ発表し、あわせて日韓の研究者と比較映画史に関するディスカッションをおこなった。上田及び板倉の発表については論文化し、*Journal of Japanese and Korean Cinema*の特集号への寄稿を予定している。

第三に、『国際映画事業総覧』『映画年鑑』等のノンフィルム資料にもとづき、神戸市・兵庫県の映画館記録のデータベース構築を進めた。2017年度研究推進費「神戸映画資料館所蔵ノンフィルム資料を用いたプラクティス研究」において収集した神戸市・兵庫県の映画館記録とも統合し、計22年分の映画館記録を集積したデータベースを構築した。なお、この研究成果については、神戸映像アーカイブ実行委員会の神戸市助成事業「アクティブ・アーカイブ・プロジェクト」で作成中の「神戸映画館 MAP」と連動しつつ、現在、web公開のための準備を進めている。